

中島
敦

文字
禍



文字禍

文字の霊れいなどというものが、一体、あるものか、どうか。

アツシリヤ人は無数の精霊を知っている。夜、闇やみの中を跳梁ちようりようするリル、その雌めすのリリツ、疫病えきびようをふり撒くまナムタル、死者の霊エテインム、誘拐者ゆうかいしやラバス等など、数知れぬ悪霊あくりよう共がアツシリヤの空に充ち満ちている。しかし、文字の精霊については、まだ誰だれも聞いたことがない。

その頃ころ——というのは、アシユル・バニ・アパル大王

の治世第二十年目の頃だが——ニネヴェエの宮廷きゆうていに妙みような
噂うわさがあつた。毎夜、図書館の闇の中で、ひそひそと怪あや
しい話し声がするという。王兄シヤマシユ・シユム・ウ
キンの謀叛むほんがバビロンの落城らくじやうでようやく鎮しずまったばかり
のこととて、何かまた、不逞ふていの徒いんぼうの陰謀いんぼうではないかと探
つてみたが、それらしい様子もない。どうしても何かの
精霊しやうれいどもの話し声ちがに違ちがいない。最近に王の前しよけいで処刑しよけいされ
たバビロンからの俘囚ふしゆう共あの死霊しりやうの声こゑだろうという者も
あつたが、それが本当でないことは誰わかにも判わかる。千に余
るバビロンの俘囚ふしゆうはことごとく舌しほを抜ぬいて殺され、その

舌を集めたところ、小さな築山つきやまが出来たのは、誰知らぬ者のない事実である。舌の無い死霊に、しやべれる訳がない。星ほしうらない占ようかんぼくや羊肝卜むなで空しく探索たんさくした後、これはどうしても書物共あるいは文字共の話し声と考えるより外はなくなった。ただ、文字の霊（というものが在るとして）とはいかなる性質をもつものか、それが皆目判かいもくらない。アシユル・バニ・アパル大王は巨眼縮髮きよがんしゆくはつの老博士ナブ・アへ・エリバを召めして、この未知の精霊についての研究を命じたもうた。

その日以来、ナブ・アへ・エリバ博士は、日ごと問題

の図書館（それは、その後二百年にして地下に埋没し、更に二千三百年にして偶然発掘される運命をもつものであるが）に通つて万巻の書に目をさらしつゝ研鑽に耽つた。メソポタミヤエジプトパピルス両河地方では埃及と違つて紙草を産しない。人々は、粘土の板に硬筆をもつて複雑な楔形の符号を彫りつけておつた。書物は瓦であり、図書館は瀬戸物屋の倉庫に似ていた。老博士の卓子（その脚には、本物の獅子の足が、爪さえそのままに使われている）の上には、毎日、累々たる瓦の山がうずたかく積まれた。それら重量ある古知識の中から、彼は、文字の靈についての説を見出そうと

したが、無駄むだであつた。文字はボルシツパなるナブウの
 神つかさどの司つかさどりたもう所とより外ほかには何事も記されていない
 のである。文字に霊ありや無しやを、彼は自力で解決せ
 ねばならぬ。博士は書物を離はなれ、ただ一つの文字を前に、
 終日それと睨にらめつこをして過した。卜者ぼくしやは羊の肝臟かんぞうを
 凝視きやうしすることによつてすべての事象を直観する。彼も
 これに倣ならつて凝視と静観とによつて眞実を見出そうとし
 たのである。その中うちに、おかしな事が起つた。一つの文
 字を長く見詰みつめている中に、いつしかその文字が解体し
 て、意味の無い一つ一つの線の交錯こうさくとしか見えなくなつ

て来る。単なる線の集りが、なぜ、そういう音とそういう意味とを有つもことが出来るのか、どうしても解わからなくなつて来る。老儒ろうじゆナブ・アへ・エリバは、生れて初めてこの不思議な事実を発見して、驚おどろいた。今まで七十年の間当然と思つて看過していたことが、決して当然でも必然でもない。彼は眼めから鱗こけらの落ちた思がした。単なるバラバラの線に、一定の音と一定の意味とを有たせるものは、何か？　ここまで思い到いたつた時、老博士は躊躇ちゆうちよなく、文字の霊の存在を認めた。魂たましいによつて統べられない手・脚・頭・爪・腹等が、人間ではないように、一

つの霊がこれを統べるのでなくて、どうして単なる線の集合が、音と意味とを有つことが出来ようか。

この発見を手始めに、今まで知られなかつた文字の霊の性質が次第に少しずつ判つて来た。文字の精霊の数は、地上の事物の数ほど多い、文字の精は野鼠のねずみのように仔こを産んで殖ふえる。

ナブ・アヘ・エリバはニネヴェエの街中を歩き廻まわつて、最近に文字を覚えた人々をつかまえては、根気よく一々尋たずねた。文字を知る以前に比べて、何か変つたようなところはないかと。これによつて文字の霊の人間に対する

作用を明らかにしようといふのである。さて、こうして、
 おかしな統計が出来上つた。それによれば、文字を覚え
 てから急に蝨しらみを捕とるのが下手へたになつた者、眼に埃ほこりが余
 計はいるようになった者、今まで良く見えた空の鷺わしの姿
 が見えなくなつた者、空の色が以前ほど碧あおくなくなつた
 という者などが、圧倒あつとうてき的に多い。「文字ノ精ガ人間ノ眼
 ヲ喰くイアラスコト、猶なお、蛆虫うじむしガ胡桃くるみノ固からキ殻うがヲ穿うがチテ、
 中ノ実たくみヲ巧たくみニ喰くイツクスガ如ごとシ」と、ナブ・アへ・エ
 リバは、新しい粘土の備忘録しるに誌しるした。文字を覚えて以
 来、咳せきが出始めたといふ者、くいやみが出るようになった

て困るといふ者、しやつくりが度々出るようになった者、
 下痢げりするようになった者なども、かなりの数に上る。「文
 字ノ精ハ人間ノ鼻・咽喉のど・腹等ヲモ犯スモノノ如シ」と、
 老博士はまた誌した。文字を覚えてから、にわかには頭髪
 の薄うすくなつた者もいる。脚の弱くなつた者、手足の顫ふるえ
 るようになった者、顎あごがはずれ易やすくなつた者もいる。し
 かし、ナブ・アへ・エリバは最後にこう書かねばならな
 かつた。「文字ノ害タル、人間ノ頭脳ヲ犯シ、精神ヲ痲痺まひ
 セシムルニ至ツテ、スナワチ極マル。」文字を覚える以
 前に比べて、職人は腕うでが鈍にぶり、戦士は臆病おくびようになり、獵師りようし

は獅子を射損うことが多くなつた。これは統計の明らかに示す所である。文字に親しむようになってから、女を抱いても一向楽しゆうなくなつたという訴えもあつた。もつとも、こう言出したのは、七十歳を越した老人であるから、これは文字のせいではないかも知れぬ。ナブ・アへ・エリバはこう考えた。埃及人は、ある物の影を、その物の魂の一部と見倣してゐるようだが、文字は、その影のようなものではないのか。

獅子という字は、本物の獅子の影ではないのか。それで、獅子という字を覚えた獵師は、本物の獅子の代りに

獅子の影を狙い、女という字を覚えた男は、本物の女の
 代りに女の影を抱くようになるのではないか。文字の無
 かつた昔、ピル・ナピシユチムの洪水以前には、
 も智慧もみんな直接に人間の中にはいつて来た。今は、
 文字の薄被をかぶった^{ヴェイル}歡びの影と智慧の影としか、我々
 は知らない。近頃人々は物憶えが悪くなった。これも文
 字の精の悪戯である。人々は、もはや、書きとめておか
 なければ、何一つ憶えることが出来ない。着物を着るよ
 うになつて、人間の皮膚が弱く醜くなつた。乗物が発
 明されて、人間の脚が弱く醜くなつた。文字が普及し

て、人々の頭は、もはや、働かなくなつたのである。

ナブ・アへ・エリバは、ある書物狂きやうの老人を知っている。その老人は、博学なナブ・アへ・エリバよりも更に博学である。彼は、スメリヤ語やアラメヤ語ばかりでなく、紙草パピルスや羊皮紙に誌された埃及文字まですらすらすらと読む。およそ文字になつた古代のことで、彼の知らぬこととはない。彼はツクルチ・ニニブ一世王の治世第何年目の何月何日の天候まで知っている。しかし、今日の天気きやうは晴か曇くもりか気が付かない。彼は、少女サビツがギルガメシユを慰なぐさめた言葉をも諳そらんじている。しかし、息子むすこ

をなくした隣人^{りんじん}を何と言つて慰めてよいか、知らない。彼は、アダツド・ニラリ王^{きんぎ}の後、サンムラマツトがどんな衣装^{いしょう}を好んだかも知っている。しかし、彼自身^{みづかみ}が今どんな衣服を着ているか、まるで気が付いていない。何と彼は文字と書物とを愛したのである！ 読み、諳んじ、愛撫^{あいぶ}するだけではあきたらず、それを愛するの余りに、彼は、ギルガメシュ伝説の最古版の粘土板を啮^{かみ}砕^{くだ}き、水に溶^とかして飲んでしまったことがある。文字の精は彼の眼を容赦^{ようしや}なく喰^くい荒^あらし、彼は、ひどい近眼である。余り眼を近づけて書物ばかり読んでいたので、彼の鷲形^{じゆけい}の

鼻の先は、粘土板と擦れ合つて固い胼胝が出来ている。文字の精は、また、彼の脊骨をも蝕み、彼は、臍に顎のくつつきそうな偻偻である。しかし、彼は、恐らく自分が偻偻であることを知らないであろう。偻偻という字なら、彼は、五つの異った国の字で書くことが出来るのだが。ナブ・アへ・エリバ博士は、この男を、文字の精霊の犠牲者の第一に数えた。ただ、こうした外観の惨めさにもかかわらず、この老人は、実に——全く羨ましいほど——いつも幸福そうに見える。これが不審といえ、不審だったが、ナブ・アへ・エリバは、それも文字

の霊の媚薬びやくのごとき奸猾かんかつな魔力まりよくのせいと見做した。

たまたまアシユル・バニ・アパル大王が病に罹かかられた。侍医じいのアラツド・ナナは、この病軽からずと見て、大王のご衣裳を借り、自らこれをまとうて、アツシリヤ王ふんに扮した。これによって、死神エレシユキガルの眼を欺あざむき、病を大王から己おのれの身に転じようというのである。

この古来の医家の常法に対して、青年の一部には、不信の眼を向ける者がある。これは明らかに不合理だ、エレシユキガル神ともあろうものが、あんな子供瞞だましの計に欺かれるはずがあるか、と、彼等らは言う。碩学せきがくナブ・ア

へ・エリバはこれを聞いて厭いやな顔をした。青年等のごとく、何事にも辻褄つじつまを合せたがることの中には、何かしらおかしな所がある。全身垢あかまみれの男が、一ヶ所だけ、例えば足の爪先だけ、無闇に美しく飾かざっているような、そういうおかしな所が。彼等は、神秘の雲の中における人間の地位をわきまえぬのじゃ。老博士は浅薄せんぱくな合理主義を一種の病と考えた。そして、その病をはやらせたものは、疑もなく、文字の精霊である。

ある日若い歴史家（あるいは宮廷の記録係）のイシユデイ・ナブが訪ねて来て老博士に言った。歴史とは何ぞ

や？ と。老博士が呆あきれた顔をしているのを見て、若い
 歴史家は説明を加えた。先頃のバビロン王シヤマシユ・
 シユム・ウキンの最さい期ごについて色々な説がある。自ら火
 に投じたことだけは確かだが、最後のひとつき一月ほどの間、絶
 望の余り、言語に絶した淫いん蕩とうの生活を送ったというもの
 もあれば、毎日ひたすら潔けつ斎さいしてシヤマシユ神に祈いのり続
 けたというものもある。第一の妃ひただ一人と共に火に入
 ったという説もあれば、数百の婢ひ妾しやうを薪まきの火に投じて
 から自分も火に入ったという説もある。何しろ文字通り
 煙けむりになったこととて、どれが正しいのか一向見当がつ

かない。近々、大王はそれらの中の一つを選んで、自分にそれを記録するよう命じたもうであるろう。これはほんの一例だが、歴史とはこれでいいのであるろうか。

賢明けんめいな老博士が賢明な沈黙ちんもくを守っているのを見て、若い歴史家は、次のような形に問を変えた。歴史とは、昔、在った事柄ことがらをいっているのであるろうか？ それとも、粘土板の文字をいっているのであるろうか？

獅子狩かりと、獅子狩かりの浮彫うきぼりとを混同しているような所がこの問の中にある。博士はそれを感じたが、はつきり口で言えないので、次のように答えた。歴史とは、昔在つ

た事柄で、かつ粘土板に誌しるされたものである。この二つは同じことではないか。

書洩かきもらしは？ と歴史家が聞く。

書洩らし？ 冗談じょうだんではない、書かれなかつた事は、

無かつた事じゃ。芽の出ぬ種子たねは、結局初めから無かつたのじゃわい。歴史とはな、この粘土板のことじゃ。

若い歴史家は情なさそうな顔をして、指し示された瓦を見た。それはこの国最大の歴史家ナブ・シャリム・シユヌ誌す所のサルゴン王ハルデアせいとうこう征討行の一枚である。話しながら博士の吐き棄すてた柘榴ざくろの種子がその表面

に汚きたならしくくつついてゐる。

ボルシツパなる明智の神ナブウの召使めしつかいたもう文字の精霊共の恐おそろしい力を、イシユデイ・ナブよ、君はまだ知らぬとみえるな。文字の精共が、一度ある事柄を捉とらえて、これを己の姿で現すとすると、その事柄はもはや、不滅ふめつの生命を得るのじゃ。反対に、文字の精の力ある手に触ふれなかつたものは、いかなるものも、その存在を失わねばならぬ。太古以来のアヌ・エンリルの書に書上げられていない星は、なにゆえに存在せぬか？ それは、彼等がアヌ・エンリルの書に文字として載のせられなかつ

たからじや。大マルズツク星（木星）が天界の牧羊者（オリオン）の境を犯せば神々の怒いかりが降くだるのも、月輪の上部に蝕しよくが現れればフモオル人が禍こゝむを蒙こうむるのも、皆みな、古書に文字として誌しされてあればこそじや。古代スメリヤ人が馬という獣けものを知らなんだのも、彼等の間に馬という字が無かったからじや。この文字の精霊の力ほど恐ろしいものは無い。君やわいらが、文字を使って書きものをしとるなどと思つたら大間違しよべい。わいらこそ彼等文字の精霊にこき使しわれる下僕しもべじや。しかし、また、彼等精霊の齋もたらす害がいも随分ずいぶんひどい。わいは今それについて研究

中だが、君が今、歴史を誌した文字に疑を感じるようになったのも、つまりは、君が文字に親しみ過ぎて、その靈の毒氣どつきに中あたつたためであろう。

若い歴史家は妙な顔をして帰って行つた。老博士はな
おしばらく、文字の靈の害毒があゆういの有為な青年をも害そこな
おうとしていることを悲しんだ。文字に親しみ過ぎてか
えって文字に疑を抱くことは、決して矛盾むじゆんではない。
先日博士は生来の健啖けんたんに任せて羊の炙肉あぶりにくをほとんど一
頭分も平らげたが、その後当分、生きた羊の顔を見るの
も厭になつたことがある。

青年歴史家が帰ってからはしばらくして、ふと、ナブ・アへ・エリバは、薄くなつた縮れちぢ毛の頭を抑おさえて考え込んだ。今日は、どうやら、わしは、あの青年に向つて、文字の霊の威力いりよくを讃美さんびしはせなんだか？　いまいまいことだ、と彼は舌打をした。わしまでが文字の霊にたぶらかされておるわ。

実際、もう大分前から、文字の霊がある恐しい病を老博士の上に齎おそしていたのである。それは彼が文字の霊の存在を確かめるために、一つの字を幾日もじつと睨くらみ暮くらした時以来のことである。その時、今まで一定の意味と

音とを有^もっていたはずの字が、忽然^{こつぜん}と分解して、単なる直線どもの集りになってしまったことは前に言った通りだが、それ以来、それと同じような現象が、文字以外のあらゆるものについても起るようになった。彼が一軒^{けん}の家をじつと見ている中に、その家は、彼の眼と頭の中で、木材と石と煉瓦^{れんが}と漆喰^{しっくい}との意味もない集合に化けてしまふ。これがどうして人間の住む所でなければならぬか、判らなくなる。人間の身体^{からだ}を見ても、その通り。みんな意味の無い奇怪^{きかい}な形をした部分部分に分析^{ぶんせき}されてしまふ。どうして、こんな恰好^{かっこう}をしたものが、人間として通

っているのか、まるで理解できなくなる。眼に見えるものばかりではない。人間の日常の営み、すべての習慣が、同じ奇体な分析病のために、全然今までの意味を失ってしまった。もはや、人間生活のすべての根柢こんていが疑わしいものに見える。ナブ・アへ・エリバ博士は気が違いそうになって来た。文字の霊の研究をこれ以上続けては、しまいとその霊のために生命をとられてしまおうぞと思った。彼は怖こわくなつて、早々に研究報告を纏まとめ上げ、これをアシユル・バニ・アパル大王に献けんじた。但ただし、中に、若干の政治的意見を加えたことはもちろんである。武の

国アツシリヤは、今や、見えざる文字の精霊のために、全く蝕まれてしまった。しかも、これに気付いている者はほとんど無い。今にして文字への盲目的崇拜もうもくてきすうはいを改めずんば、後に臍ほぞを噬かむとも及およばぬであろう云々うんぬん。

文字の霊が、この讒ざん謗ぼう者をただで置く訳が無い。ナブ・アへ・エリバの報告は、いたく大王のご機嫌きげんを損じた。ナブウ神の熱烈ねつれつな讚仰さんぎよう者で当時第一流の文化人たる大王にしてみれば、これは当然のことである。老博士は即日そくじつ謹慎きんしんを命ぜられた。大王の幼時からの師傅しふたるナブ・アへ・エリバでなかったら、恐らく、生きながらの

皮剥かわはぎに処せられたであろう。思わぬご不興がくぜんに愕然がくぜんとした博士は、直ちに、これが奸譎かんけつな文字の霊の復讐ふくしゅうであることを悟さとった。

しかし、まだこれだけではなかった。数日後ニネヴェ・アルベラの地方を襲おそった大地震おおじしんの時、博士は、たまたま自家の書庫の中にいた。彼の家は古かったので、壁かべが崩くずれ書架しょかが倒たおれた。夥おびただしい書籍しょせきが——数百枚の重い粘土板が、文字共の凄まじい呪のろいの声と共にこの讒謗者の上に落ちかかり、彼は無慙むざんにも圧死した。

(昭和十七年二月)

日本文学電子図書館

「中島敦 ちくま日本文学012」

著 者：中島 敦

制作者：宮澤一郎

出版社：筑摩書房

2009年6月30日 第3刷発行



日本文学電子図書館